

周辺に出現した霧の微細構造から Stagnation streamline を見出し、これを局地風モデルによる結果と対比させて解析したものを発表した。この他は全て中国側の発表であり、谷間にある市街において、超音波風速計、熱線風速計 (12 μ)、放射計、係留気球等を用いて観測した乱れのスペクトル解析結果に関する発表(Wang, Jiemin)では、解析結果が一様な地形の場合と殆ど同じで、これは谷のスケールに比べて測定高度が 6.45 m と低いために地形の影響を測定していないと思われる。

また風場を観測によるデータから客観解析によって求めて、複雑地形における大気汚染質の輸送過程をモンテカルロ法を用いて計算した結果をガウス型のブルームモデルと比較した発表 (Zu Tielin) などがこのセッションでは比較的印象に残っている。

夕刻のクロージングセレモニーを終えた後、会場となった西郊賓館に近い似たようなたたずまいの龍柏飯店において外国からの参加者を招待した豪華なバンケットが催された。投宿先のホテルの室に放り込まれていた招待

状によると、ホストは上海人民政府となっていた。

中国では今回の会議を上海で開催、運営するために、かなり力を入れて取り組んだ様子が察しられた。例えば、日本からの参加者には上海人民政府が在日中国大使館に対して、入国ビザ発給依頼の公文書を参加者ひとりひとりについて発行していること、閑静な会場の用意などである。また、夜には上海雑技団のショー見学などというプログラムを用意し、劇場舞台の上に「熱烈歓迎 ASAAQ」の垂れ幕や、マジックショーの小物にまで ASAAQ の文字が入ったものが見られたことなどにも伺える。

上海を訪問してみて、中国側では外国からの訪問者に対して、あの天安門事件の暗い印象を与えないようにしていること、またそれによって一時激減した外国人観光客を取り戻そうと努力している姿勢のようなものが感じられた。

なお、第4回 ASAAQ は1992年にウラジオストックにおいて開催される予定とのことである。



森永由紀著

魅せられて、南極

—初の女性観測隊員

奮闘記—

時事通信社 1990年3月刊

108ページ 1,200円(税込)

この秋、第33次隊を送り出す日本の南極地域観測隊だが、女性の観測隊員はまだ1人しか実現していない。第29次南極地域観測隊の夏隊 (1987年11月～1988年3月) に雪氷部門の研究観測隊員として選ばれた本書の著者、森永由紀さんである。私は第28次越冬隊の一員として昭和基地で第29次隊を迎えたが、森永さんが観測隊の中で何の違和感もなく見えたことがたいへん印象に残っている。もちろん陰でいろいろ御苦労があったことは想像に難くないが、このときの経験が綴られたのが本書である。「週刊時事」連載の単行本化であり、気軽に読める

1冊である。

著者は、現在活躍中の若手雪氷学研究者の一人であり、観測隊員に選ばれた当時はまだ筑波大学大学院の学生であった。読者は著者の若くて新鮮な目をおして、今日の日本の南極観測の日常を見ることができよう。そこには、あの「タロ・ジロ」の物語のような「探検」風の悲壮感は全くない。私も含め、南極観測隊員の多くがそう感じ取っていることは確かである。

本書の最初の3分の1は、著者が「雪と氷」、そして「南極」に出会うまで、幼少からの「雪が好き」という気持ちを、具体的に雪氷研究というかたちで着実に実現していくまでが語られている。一般の人に、ふだん縁遠いと思われがちな研究の世界や南極観測隊の生活といったものを、身近に感じさせてくれることと思う。残念なのは本書が「夏隊」の参加記であることで、「初の女性隊員越冬記」が出る日を期待しているのは私だけではあるまい。

(気象庁観測部・山本 哲)